

篠島大津絵（しのじまおつえ）

蟹江尾八

大津絵節の最大の特徴は、旋律や音階が著しく変化することであり、陽旋法の旋律から陰旋法に変化するのは序の口で、同主調の中での転調だけでなく、二度、四度、五度の転調が無造作にやってのけられ、少しも不自然でなくより新鮮な魅力を持ち、また不思議なことに、三味線が陽旋法に対し、唄が陰旋法で、その逆もしばしきば行われている。

江戸時代の文化文政（一八〇四〜一八二九）徳川家斉が將軍の時代に大いに持て囃された、貴重な日本音曲であると言える。

篠島は、知多半島と渥美半島の間あたりにあり、この唄は、昭和四〇年ころNHKの「民謡をたずねて」で放送されたもので、海から上がり、たき火で体を温める海で働く「海女」の様子が歌われ、「お前たち」までは大津絵節の旋律をそのままの形で伝えているが、それ以降は別の旋律を繋げている。

大津絵節が、どのようにして愛知県の離島に伝わったかは、文化の流動の盛んな化政文化時代の置き土産であろうと思われるが、本家の「大津絵節」が歌い出された頃のこととは殆ど分かっていないが、ただ大津宿場町の遊女が歌っていた小唄が元であると言われている。他に、「きりぎりす」「お正月」「アメリカ大津絵」「げぼう」「箱根八景」「海女」「芝居づくし」「梅忠」「七福神」「白虎隊」「先代萩」「白井権八」「高知町づくし」「長崎七不思議」「お蔭まいり」「千両箱」「近江八景」などか全国的にあり、鹿児島から北は仙台まで確認されており、千藤幸蔵氏によりまとめられている